多様な「居る」を支える
インド・ケーララ州のスペシャル・スクール

中　江　優　花*

スペシャル・スクールでの舞踏会

「あ，ユカが来た来た！日本のうたをうたって！」と突然マイクを渡された．

赤道近くに位置するケーララ州は，3月下旬には気温が40度を超える日々が続く．筆者は，酷暑のなか片道1時間半〜2時間かけて3つのスペシャル・スクールに通い，「障害者」教育の実践についての現地調査をしていた．

「今日は絶対に来てね」と連絡を受けたので，あるスペシャル・スクールに向かった．住宅街の角を曲がるとすぐ，伝統的な楽器が奏でる音楽や流行りの映画のうたが聞こえてきた．さらに近づくと賑やかな声が大きくなり，校舎前の狭い玄関に生徒や教員，その家族，近隣の人々など，大勢の人々がひしめき合っていた（写真1）．校長先生と仲の良い映画俳優まで来ており，どうやら今日は映画俳優たちとのダンスパーティーが開かれているようだ．

校長先生たちが筆者を大衆の目前に手招きし，日本のうたをうたうようにとマイクを渡した．この瞬間，筆者は今日呼ばれた理由を理解して面食らった．「うたはそんなに得意ちゃうねんけどなぁ」と思ったが，大勢の期待の眼差しを向けられ断るすべもなく，仕方なく日本の某国民的アイドルのうたをうたった．みんな手拍子でリズムをとりながら，ノリノリで聞いてくれた．うたい終わったときには拍手喝采してもらい，すがすがしい気持ちになった．これが筆者にとって大衆の前でうたをうたう人生初の経験となった．

その後はうたったり踊ったり，大騒ぎした．決まった振り付けはなく，各々がその場で振りを創作して踊った．朝の9時に始ま

写真1　ダンス舞踏会

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

り，気づけば夕方の 4 時過ぎまで踊り狂っていた．おそらくテレビ番組で目にするバブル時代のディスコのような光景であったと思う．きれいな衣装を身にまとって毎晩踊るようなディスコと異なるのは，スペシャル・スクールのユニフォームを着た「障害」をもつこどもたちとその関係者が授業の代わりに踊っているということ．このようなダンス・パフォーマンスはほかのスペシャル・スクールでも日常的に起こっていた．

スペシャル・スクールとは―ダンス生活を送る日々

インド・ケーララ州のスペシャル・スクールの歴史的変遷やその実践に関する詳細な論考は別稿に譲る［中江 2021］．ここでは簡単に訪問したスペシャル・スクールについて紹介する．以下に記述する人物や学校名はすべて仮名表記である．

スペシャル・スクールや在籍する生徒の特色はその立地条件に依拠するが，訪問したスペシャル・スクールの共通項を挙げるとすれば，いずれも知的障害児や発達障害児を主な対象としている点がある．しかし，受け入れには障害の種別や年齢の制限を厳密に設けていないため，州政府が発行する障害者証明書をもたない児童や中高年世代の生徒も在籍している．また障害の種別や年齢だけでなく，ジェンダー，カースト，宗教などにおいても条件はない．この点において私が訪問したスペシャル・スクールはいずれも，多種多様な属性をもつ人々が集う場となっていた．運営はカトリック系の慈善団体が主体であり，財源はケーララ州政府の支援金と有志の支援者からの寄付金によって賄われている．近隣住民が食事をもってくることもあり，スペシャル・スクールの運営にはあらゆるアクターが関与している．

スペシャル・スクールでは，ケーララ州政府が定めるシラバスに沿った授業（数学や英語，マラヤーラム語など）や生活実践的な授業（チャイづくりや料理など），職業訓練などあらゆるプログラムが非常に緩い枠組みで提供されている（写真 2）．たいてい時間割どおりに進むことはなく，授業時間に生徒や教職員が踊りだし，ダンス・パーティーさながらの光景が広がることも日常茶飯事であった．

訪問したスペシャル・スクールでは，在籍する生徒の多くが「十分に話すことができない」人々であった．このような人々の間では，互いの表情や身体所作，それまでの経験に基づく意思の汲み取り，ボールなどの物を介した意志表出といった非言語コミュニケーションでの交流が主となる．上述したダンスやうたも，こうした言語に代わるコミュニケーションのひとつであるのかもしれない．

写真 2　マラヤーラム語の授業

ダンスやうたでは，「話すことができるか否か」を問わず大勢の人々が一斉に参加することができる．マラヤーラム語を十分に話すことのできない筆者でさえも楽しい時間を共有できた．こうした多様な代替コミュニケーションは，障害の種別，ジェンダー，カースト，宗教においてあらゆる属性をもつ多種多様な人々が，同じ空間を生きるうえでのつながりを支えていると考えられる．

「居る」が保障された空間

これらのスペシャル・スクールは，筆者にとっても安心して「居られる」場所だった．校門を一歩出れば，運転の荒いバスや車が走り回り，排気ガスや土煙が立ち込め，外国人女性にとっては治安も良くはない．スペシャル・スクールはこうした危険から身を守ってくれる場であった．ただそれだけではない．そこは単純に「居やすかった」のである．何かをする，あるいは何かをしているためには，まずそこに「居る」必要があり，その「居る」が担保されていたと感じたのだった．

現地語を話すことのできない筆者はスペシャル・スクールへ行っても，ただ座って過ごすことが大半だった．特に忙しく働いた覚えもない．そんな筆者を，スペシャル・スクールの人々は咎めることはない．時に役割を与えられることもあったが，ただ座っているだけの筆者に対し「明日も来てね」「次はいつ来るの？」と言い，チャイやお菓子，給食を共にし，一緒にうたって踊る．そうして過ごしているうちに，気づけばスペシャル・スクールの人々の日常に溶け込んでいた．スペシャル・スクールの人々が内部アクターの一員として扱ってくれたことが，筆者の「居る」を支えていた一因だと思う．

スペシャル・スクールはまるで「アジール」[1] だった．アジールとは集団の規範から外れなんとなく生きづらさを感じている人々が逃げ込む「避難所」のことであり，そこにいれば，責められたり傷つけられたりせず，気を許すことのできる場所である［東畑 2019: 286–287］．

筆者は日本の医療・福祉現場で勤務した経験があり，そこでは障害や病気をもつ人々のセラピーを担っていた．当然のことではあるが「失敗してはいけない」プレッシャーに何度も押しつぶされそうになった．安心して「居る」ことのできる場所ではない．それだけではない．東畑［2019］が指摘しているように，医療や福祉の現場がアジールからアサイラム[2] へと頽落することがある．アサイラムとは，そこに「居る」人を画一的に管理・監視し，やがて自由を奪っていく場所のことである［ゴッフマン 1984］．アジールとアサイラムが表裏一体であることはいわれ

1）アジールとは，犯罪者がひとたびその中に入り込むと，それ以上その罪を責めることができなくなる空間のことである［夏目 2009: 22］．東畑は，アジールのことを安全が確保された「避難所」であり，神仏のご加護を受けた「聖なる」場所だと指摘している［東畑 2019: 286–287］．

2）アサイラム（全制的施設）とは，「多数の類似の境遇にある個々人が，一緒に，相当期間にわたって包括社会から遮断されて，閉鎖的で形式的に管理された日常生活を送る居住と仕事の場所」である［ゴッフマン 1984: v］．

てきたが，医療や福祉の現場において人々の「居る」を支えようとしたとき，同時に人々の「閉じ込め」が起こることもある［東畑 2019: 302］．こうした医療や福祉現場が抱えるダークな部分を目の当たりにし，自分自身がその制度の一端を担っていることに複雑な感情を抱いて「居づらさ」を感じることも度々あった．

訪問したスペシャル・スクールではそのような葛藤を抱くことがなかった．筆者がその制度に完全に組み込まれていなかったことが一因とも考えられるが，そこは筆者にとって少なくとも「居る」が脅かされる場ではなかった．では，訪問したスペシャル・スクールが，「障害」をもつ生徒や教職員，私の「居る」をいかにして支えていたのか．今後も調査していきたいと思う．

引　用　文　献

ゴッフマン，E. 1984.『アサイラム―施設被収容者の日常世界』（ゴッフマンの社会学 3）石黒毅訳，誠信書房．

東畑開人．2019.『居るのはつらいよ―ケアとセラピーについての覚書』医学書院．

中江優花．2021.「インド・ケーララ州におけるスペシャル・スクールの実践と意義―その「包摂性」に着目して」『アジア・アフリカ地域研究』21(1): 1–35.

夏目琢史．2009.『アジールの日本史』同成社．

かけがえのない居場所

―サードプレイスとしての闇市―

北　嶋　泰　周 *

終身刑を言い渡されたブルックスという老囚人は 50 年の服役期間を経て仮釈放を言い渡されるが，彼は泣きながらそれを拒否しようとする．シャバに出た孤独な彼は，我々にとっての日常生活についていけず「疲れ果てた，不安から解放されたい」という言葉を残して首吊り自殺をした．これは 1994 年公開の映画『ショーシャンクの空に』で描かれた，我々なら誰も行きたいとは思わないであろう刑務所という空間が，ひとりの元老囚人にとっては唯一の「かけがえのない居場所」であったことを印象づけるシーンである．我々には到底受け入れられない場所が，別の誰かにとっては「かけがえのない居場所」となることもある．

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科